「十字架の愛」

ローマ人への手紙８：３２

April.2.2023

ローマへの手紙８：３２（パワポ）

Preface

主イエス・キリストの十字架は愛です。

限界もなく、区切りもなく、失敗もなく、条件もない愛です。

愛すと言ったら、愛す愛です。

この愛に出会い、この愛に触れられ、この愛に包まれ、この愛を悟ると、その愛の前に頭を垂れ、自然と跪くようになります。

そして、その愛に気付かずに生きていたことが申し訳なくて、申し訳なくて、仕方がない程に涙が溢れ出てきます。

それまで、その愛に気付かずに生きてきたことに対して、何とか、少しでも、１ｍｍでもお返しし応えたくて、「私もあなたを愛しますと」告白し、「私もあなたをこれから愛しながら生きます」と、心に決めます。

ところが、その愛のうちに生かし続けて下さっている事実には変わりないのですが、私の方が、こちら側が、その愛に生きているのか、神を果たして愛しながら生きているのかということを深刻に顧み、聖書の言葉とともに祈りつつ考えてみますと、なおも愛していないことを、神を愛していないことを、イエス・キリストを愛していないことを認めざるを得なくなります。

「私はあなたを愛しています」と言ったところで、その言葉が明らかに嘘であることを認めざるを得なくなります。

なぜならば、「神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です」と、「目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません」と、使徒ヨハネが言っている通りだからです。

先週１週間という時間でさえも、他者に対してほんの少しの憎しみも抱かずに生きられたなんてことは到底言えないようなところを生き、条件付きの愛、限りのある愛、区切りのある愛しか持てなかったことを正直に告白するしかありません。

十字架のイエス様を見上げての愛ではなく、人と比較して、または自分なりの価値観に従って取り繕った、愛ではない愛のようなものを「愛だ」と無意識のうちに嘘をつきながら、愛を装っていたことを正直に認めるしかありません。

中世スペインの修道女アビラが、「おお主よ。私はあなたを愛していません。

そればかりか、あなたを愛したいとも思っていません。しかし、それでも、私は、あなたを愛したいと思っています」という正直な告白が、やけに心に迫って来ます。

そんな私たち人間の愛とは裏腹に、主イエス様の愛には、揺るぎがありません。
愛すと言ったら、愛す愛です。
赦すと言ったら、赦す愛です。
惜しまないと言ったら、惜しまない愛です。
限りのない愛です。

Part One

先週のメッセージは、ポール・キム先生がして下さいましたが、そのメッセージの通訳を私がするにあたって、うちの妻とひとふた悶着ありました。

忘れもしない先々週の月曜日、用事を済ませて水戸から帰ってくる車の中で、家内が突然私に、「ポール先生の説教通訳は、あなたじゃなくて、もっと英語が堪能な方にお願いしたらどう？」と提案してきたのです。

先週のメッセージをお聞きになった方々はお分かりになると思いますが、ポール先生の説教は、ちゃんと説教原稿があるのですが、その時の神様の導きに従って自由にお話しされるので、ちょっと慣れていないと通訳が難しいところがあるんです。

だから家内は、私の英語能力の無さを心配して、良かれと思って提案してくれたのですが、私は、その家内の言葉に、カチンと来ました。

「何を言ってんだ！　説教は語学の能力で通訳するもんじゃなくて、ポール先生と俺のうちにいて下さっている同じ聖霊様の助けとお働きと恵みによって通訳するんだよ。　牧師夫人のくせして、何でそんな不信仰なことを言うんだ！ポール先生のメッセージをめぐみ教会の礼拝で通訳するのが、俺の夢だということを知ってるだろ？　そのために懸命に準備しているし、俺を見くびってくれるな！　そんなこと言う前に、先ず祈れ！」と怒り心頭で、その後も妻は申し訳なかったと思ってずっと話しかけてくれるのですが、それから火水木金曜日の夜までとポール先生がアメリカからいらっしゃる前日まで、妻にまともに口を利くことをしませんでした。

流石に、「ポール先生が明日いらっしゃるのに、これじゃいけない」と反省して仲直りしましたが、これが、私自身の愛の限界です。

結婚式で目に涙を浮かべながら、「あなたは神の教えに従って、夫としての分を果たし、常に妻を愛し、敬い、慰め、助けて変わることなく、その健康の時も、病いの時も、富める時も、貧しき時も、命の日の限りあなたの妻に対して堅く節操を守ることを約束いたしますか」という問いに、「はい、神と人との前で約束いたします」と言ったのに、愛の無い自分を認めざるを得ません。

Part Two

私たちの愛は、世の中の愛は、条件付きです。
ギブ&テイクの愛です。
与えたほどに受けないと、恨めしく、残念で、寂しく、悔しく、心のうちに怒りが湧いてきます。
私たちの愛は、世の中の愛は、受けたならば返さなければならない、貰ったならば与えなければならないと、負担感を覚えてしまいます。
せっかく愛を受けたにもかかわらず、負担を感じてしまいます。

そして、私たちの愛、世の中の愛は、有限です。
人間の愛は、豊かではありません。
人間の存在そのものが有限だからです。
資源が有限で、供給が有限なように、ずっと与え続けることが出来ません。

さらに、どんなにたくさん所有したとしても、足りなさを覚えるのが人間です。
それゆえに、人の愛には満足というものがありません。
どこかしら、足りず、不安定で、不安で、形がいびつで、でこぼこしています。

人の愛は長く続かず、寿命があり、どんなに長く続いたとしても、死と共にその愛は終わってしまいます。
熱くなったかと思うと冷めてしまい、情熱的だと思った矢先、倦怠感を覚えます。
少し慣れてくると、雑に扱うようになり、その上、軽蔑するようにまでなります。

また、私たちの愛は、世の中の愛は、差別する愛です。
自分が好きで、好む対象を愛します。
自分の味方を愛します。
自分の味方ならば、条件なく正しいと考えます。

そして、私たちの愛は、世の中の愛は無分別で、軽率です。
時には、理由もなく憎みます。
理由もなく嫌います。
理由もなく殺すこともあります。
時に暴力的で、無礼です。
愛という名のもとに暴力を振るい、愛という名のもとに傷つけます。
でも、十字架の愛は、愛のためにご自身が傷つけられました。
傷つけられて終わるどころか、死にまで従われる程に愛されました。

だから私たちは、神の愛を知り、経験しなければなりません。
愛のためにこの地に来られ、私たちを愛するために十字架で死なれたイエス・

キリストの愛に、私たち目が開かれなければなりません。

Part Three

十字架の愛は、最も愛すことが困難な人を愛する神秘的な愛です。

ローマ人への手紙５：６－１０（パワポ）

イエス・キリストの十字架の愛は、弱い者を、不敬虔な者を、罪人を、神の敵であった私たちを愛する愛です。

世の中で最も愛すことが困難な人を愛する神秘的な愛が、主イエス様の十字架の愛です。

今日の聖書箇所、

ローマ人への手紙８：３２（パワポ）

私たちすべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるでしょうか。

という愛です。

金銀なんかとは比較にならない、知識や地位などとも、天地万物どんなものとも比較にならないものを恵んでくださった愛です。

十字架の愛は、父なる神様がひとり子イエス様を惜しむことなくお与えになった愛です。

最愛のひとり子を、神の御姿なるお方を私たちのために犠牲になさった愛です。

惜しむことなく与えた愛です。

Part Four

聖書は、キリストを信じる者たちのことをキリストの花嫁・新婦と言っていますが、聖書の言葉から離れしまったキリスト教会に、聖書の御言葉に立ち返る運動を起こした宗教改革者マルチン・ルターは、「私たちがイエス様の新婦となる前は、まるで遊女のようであった」と言います。

イエス様は、愛すると言ったら愛するという愛で、遊女である私たちと結婚し、私たちの新郎となって下さることをもって、私たちを聖なる者となり、麗しい者となったと言って下さいます。

新郎と新婦が結婚をすれば一つのからだとなり、良いものも悪いものも一緒に共同で所有するようになります。

そこで、新郎であられるイエス様は、私たち新婦が持っている悪いものすべて

を持って行かれ、新婦にすべての良いものを下さったと聖書は教えてくれます。
その新郎の愛ゆえに、私たち新婦は安息を覚えるようになります。

私たち人間は、思い荷物を背負って人生を生きて行きますが、私たちが背負っている物で最も重い荷は、罪の荷です。
その思い罪の荷を負って、傷つけ合いながら、苦しめ遭いながら生きてしまいます。
時に恐ろしい復讐心を抱きながら、その復讐心に執着しながら生きて行ってしまいます。
そして、その憎しみと復讐心のために、安息することが出来ません。
憎しみほど、人を疲れさせるものもありません。

でも、イエス様は、その重い憎しみさえも担って下さいました。
そんな誰も負うことの出来ない思い荷を代わりに負って下さるのは、イエス様ただお一人です。
イエス様は、人から崇め奉られることを望むお方ではなく、むしろ、私たちを尊い新婦として、良いと思われることの極致を私たちに恵んで下さるお方です。

Conclusion

私たちの重い荷物を下ろすことの出来るところは、主イエスの十字架の下だけです。

「天路歴程」という本をご存知の方も多いと思いますが、作者のジョン・バニヤンは、その物語の中で、人の背中に負われた重い荷物が、主イエスの十字架によって離れて行く様子を描いています。

今週１週間は、そんな主イエス・キリストの十字架の贖いを覚える受難週ですが、
今一度私たち、この十字架の愛に感謝し、すべての重い荷をイエス様にお委ね出来る恵みを覚え、実際に信仰を持ってお委ねし、イエス様がお与えくださる安息を得させて頂きたいと思うのです。
続く聖餐式をも用いて下さり、私たち一人一人の魂が、主の安息を覚えられたらと願います。

お祈りいたします。

祝祷：ローマ人への手紙８：３２